

方言が無意味語アクセントに与える影響の検討

傳研究室 20L1055H 住吉 正成

1. はじめに

単語を正確に発音することは、相手との意思疎通を図る上で、単語が指すものを明確に相手に伝えるために重要なものとなっている。それは初見の単語にも当てはまり、多くの場合で他人の発音とも一致する。これは日本語のアクセントの規則性によって可能になっている。

窪園(2006)によると、日本語のアクセントには下がり目のある起伏型と下がり目の無い平板型の2種類があり、東京方言における外来語のアクセントには語末から3モーラ目にアクセントが置かれる起伏型で読まれるという規則性が見られる。しかし、例外もあり李(1994)によると、単語が2モーラの時には語頭にアクセントが置かれ、原語のアクセントに強く影響を受けるものはそのアクセントで読み上げられること、語末から2モーラ目が「ン」「ッ」の時や語末が「ー」「ン」「ス」「ル」の時にアクセント位置が一つ前にずれることを述べており、塩田(2016)は語末から3モーラ目が「ッ」「ン」「ー」の時にアクセント位置が一つ前にずれることが述べられている。この規則性について本研究では外来語アクセント規則と呼ぶ。

しかしながら、このような規則性があっても、他人とアクセントが一致しない場合もある。

本研究では、初見の単語のアクセントが人によって異なる場合がある原因の一つとして考えられる方言に焦点を当て、初めて見る単語を自分で生成した無意味語を用いることで再現し、それをアクセントが異なるとされる東京式、崩壊、二型のアクセント圏の地域に住む10~20代の参加者に読み上げさせる実験1と、京阪式のアクセント圏に住む50~80代の参加者に読み上げさせる実験2を行い、分析することで方言が無意味語アクセントにどのような影響を及ぼすかを調べた。

2. 実験1

2.1. 目的

実際に各アクセント圏に住む参加者が生成された無意味語を読み上げたものを分析することで、人が初めて見る単語を読み上げる際のアクセントがどれだけ外来語アクセント規則に従っているのか、方言がどのように影響を与えているのか分析することを目的とする。

2.2. 方法

参加者：東京式アクセントの地域に住み、他のアクセント圏に移住したことの無い14~27歳の男女7名(男性3名、女性4名)、京阪式アクセントの地域に住み、他のアクセント圏に移住したことの無い18~21歳の男女6名(男性4名、女性2名)、崩壊アクセントの地域に住み、他のアクセント圏に移住したことの無い16~22歳の男女6名(男性5名、女性1名)、二型アクセント圏出身で他のアクセント圏に移住経験のない18歳の男性2名、また、異なるアクセント圏への移住経験がある23~24歳の男女3名(男性2名、女性1名)、合計24名を対象とした。

装置：参加者がそれぞれ所有しているパソコン、スマートフォンを使用し、zoomの画面共有機能を使って刺激を提示した。

刺激：

実在する外来語：実在する外来語については参加者に知られている単語が望ましいため、「NTT単語親密度データベース」に基づいて親密度(1:低~7:高)を4以上で統制し、2~6モーラの外来語をそれぞれ15語ずつ、計75語を使用した。「NTT単語親密度データベース」は、数値が大きくなるほどなじみ深いものであることを示しており、前述したように実在語は参加者に知られている単語が望ましいため単語親密度

が中央値の4以上のものとした。

無意味語：「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」中の普通名詞 346526 語から算出したモーラ遷移確率に従って生成した無意味語の内、2~6モーラの単語をそれぞれ15語ずつ、計75語を使用した。また、モーラ遷移確率とは、図1に示したように、「カ」の後には「イ」が25.1%、「ン」が21.1%続くというようにあるモーラの上に特定のモーラが続く確率のことをいい、この確立に従って生成することで不自然なモーラの連続をもつ単語になることを防いだ。

手続き： 実験は参加者1人ずつ、zoomを用いて行った。刺激はPowerPointのスライドショーを使い画面共有で提示した。実在する外来語と無意味語を分けて、それぞれ各モーラから5語ずつ抽出し25語の1ブロックとし、それを実在する外来語と無意味語で3ブロックずつの計6ブロックに分け、参加者ごとに提示するブロックの順番、ブロック内での単語の順番はランダムに決定した。参加者が画面に提示された単語を読み上げると次の単語が提示され、1ブロック終了するごとに30秒の休憩を挟んだ。6ブロック終了後、年齢や出身地についてのアンケート調査を実施し、実験の様子は録画した。

2.3. 結果

実験の結果を、音声分析ソフト「Praat」を用いて録音した音声のピッチの高低に従って1モーラごとに「H」「L」で記述し、外来語アクセント規則及びその例外に該当する割合を該当率として算出したものが図2である。

4モーラの単語を除き、どの方言でも該当率が50%を上回っていたが、4モーラの単語では該当率が実在語、無意味語ともに該当率が50%付近にとどまる結果となった。

また、該当率について、混合効果ロジスティック回帰分析を行ったところ、3モーラの実在語において移住と二型、移住と東京においてのみ方言の効果が見られた。

次に、それぞれのモーラ数ごとのアクセントパターン平均出現回数を図2、3に示した。

2、3モーラの単語については、どの方言においても実在語、無意味語ともにほとんどが外来語アクセント規則に従って「HL」や「HLL」で読まれ、そうでないものは平板型である「LH」「LHH」で読み上げられた。また、実在語の方が無意味語よりも平板型で読み上げられることが多かった。

4モーラの単語については、どの方言においても実在語、無意味語ともに平板型である「LHHH」で読み上げられることが多く、外来語アクセント規則に従ったものを上回る結果となった。

5、6モーラの単語については、外来語アクセント規則の例外に当てはまるものが多かったが、そうでないものについては外来語アクセント規則に従った「LHHLL」が多かった。

図2.各モーラ時のアクセントパターン平均出現回数(左:2モーラ時,中央:3モーラ時,右:4モーラ時)

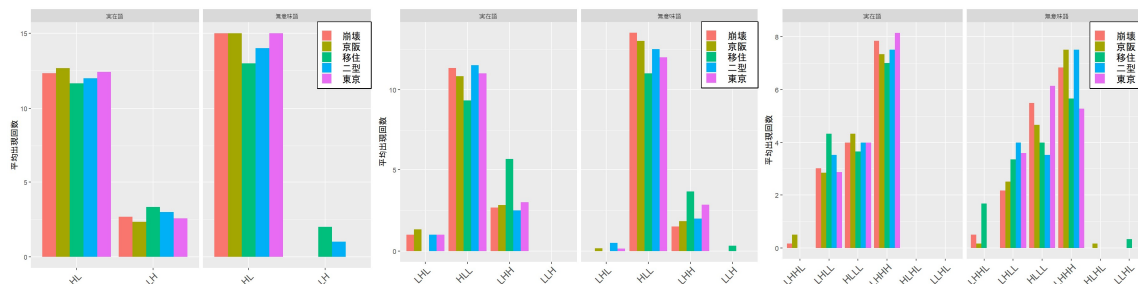


図1. 方言ごとの外来語アクセント規則への該当率の平均

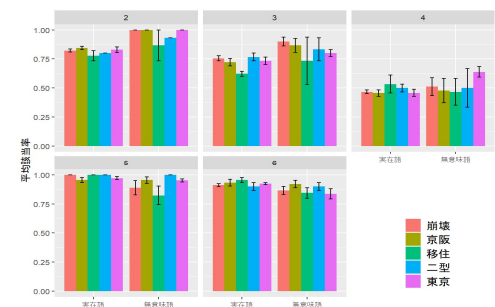
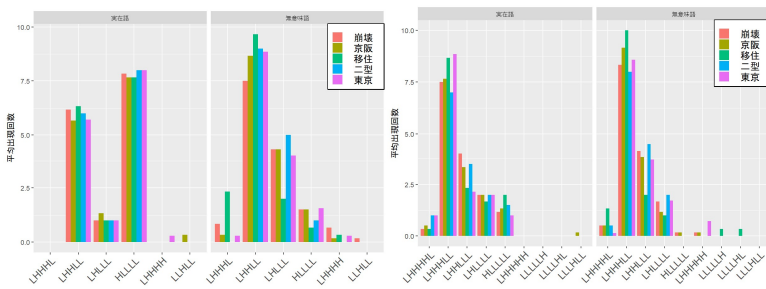


図3.各モーラ時のアクセントパターン平均出現回数(左:5モーラ時,右:6モーラ時)



3. 実験 2

3.1. 目的

実験 1 で方言の影響があまり見られなかった理由として参加者が若年層を中心としており、彼らの標準語化が進んでいた可能性が考えられたため、中高齢の京阪式アクセント話者である方を対象として実験 1 と同様の方法で実験を行い、実験 1 の京阪式アクセント話者の結果と比較することで、若年話者の標準語化が進んでいるのかを調べる。

3.2. 方法

参加者：京阪式の地域に住み、他のアクセント圏に移住したことがない 53～87 歳の男女 8 名(男性 3 名、女性 5 名)を対象とした。

装置：実験 1 と同じく、参加者がそれぞれ所有しているパソコン、スマートフォンを使用し、zoom の画面共有機能を使って刺激を提示した。

刺激：実験 1 で使用した単語と同じものを使用した。

手続き：実験 1 と同じ手続きで実施した。

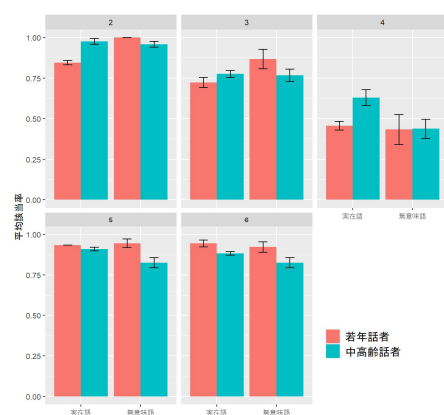
3.3. 結果

実験 1 と同様に、録音した音声を「H」「L」で記述し、実験 1 の京阪式アクセントの若年話者と実験 2 の中高齢話者と該当率を算出し、並べたものが図 4 である。

中高齢話者のデータについても 4 モーラの単語の時に該当率が低くなるものの、それ以外の時には該当率が高かった。また、若年話者ではほとんどの場合で実在語よりも無意味語の方が該当率が高くなっていて、中高齢話者ではすべてのモーラの場合に無意味語の方が実在語よりも該当率が低くなっていた。

また、該当率について混合効果ロジスティック回帰分析を行ったところ、2 モーラの実在語の場合と 4 モーラの実在語の場合に年齢の効果が見られた。

図4.年齢層ごとの外来語アクセント規則への該当率の平均



次に、それぞれのモーラ数ごとのアクセントパターン平均出現回数を図 9～13 に示した。

2、3 モーラの単語については、外来語アクセント規則に従った「HL」や「HLL」が最も多く、一部の単語が平板型である「LH」「HH」「LHH」「HHH」が多かった。

